

子供のころ、いろいろと収集趣味があったが、器は単に食事をし、お茶を飲む道具の一つと考えていた。陶器に興味を持ったのは、若いとき入り浸っていた居酒屋で頂いた、器底に馬の浮き彫りのある相馬焼の湯呑茶碗であった。「この馬が揺れて見えるようななったら、酒は飲むのをやめよ」とオーナーに諭されてからのように記憶している。



相馬焼 湯呑

自分は多分遺伝的に酒が飲めないタイプの間人だと、年月を経てやっと悟ったが、若いときは考えもせずガブ飲みし、翌日二日酔いで頭をかかえていた。そんな時に居酒屋のオーナーにたしなめられた。頂いた湯呑は現在も戒めのためにとってある。

その後、病をきっかけに益々酒が飲めなくなった。嫌いになったわけでもない、なめるように酒香、酒器を眺めて我慢している。

社会人になり、あちこちのジャンクショップを覗き、気に入った、安い湯呑、徳利、盃、などをいくつか購入した。これらのものは、興味ない人にとっては、汚らしい不用品にしか見えないと思うが、購入していると、その時代背景など、この器はどんな人が造り、使用したのだろうかなど想像したり、作陶の参考にするために購入した。そんなガラクタをいくつか紹介してみたいと思う。

貧乏徳利という名が気に入った一升徳利



ボタン絵の白磁一升瓶



貧乏徳利



貧乏徳利

写真からいかにも貧乏人が大切に抱え、家路を急ぐのが思い浮かばれる徳利である。現在朝ドラ「らんまん」牧野富太郎モデルの中の飲酒場面によく出てきた、貧乏徳利のボタン絵の白磁一升瓶は江戸末期、明治時代から

つい昭和の前半まで使用されたというし、最近まで、居酒屋などで見られた。

江戸の終わりから明治時代、ガラス瓶が普及する大正末期まで貸し徳利、通い徳利、貧乏徳利と言われた陶器の徳利が製造された。集会や個人などで酒屋から、中身の酒を「借り徳利」で購入し、空いた徳利は返却した。酒販売店は良い宣伝にもなるので、銘酒名、地名、氏名などを書いた徳利である。

牡丹絵の白磁瓶は松本のジャンクショップで、文字の書いてある貧乏徳利は信楽焼、伊賀焼きの生産地を旅した時にジャンクショップで見つけ購入したものだ。

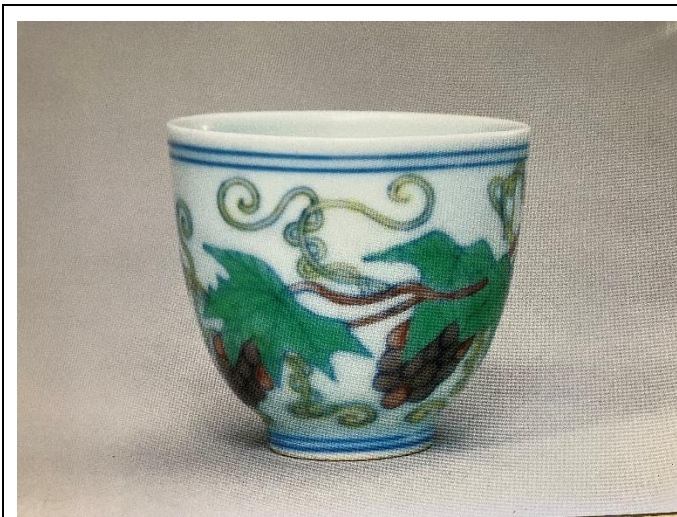
ボタン絵の磁器徳利は数 10 年前吉祥寺の居酒屋で使用しているのを見た記憶があり、おでんの鍋か何か忘れたが大きな鍋に入れてあったのを覚えている。

磁器は有田や波佐見焼が多く、陶器製徳利は美濃高田焼や丹波立杭焼きが多かったらしい。薩摩焼などのものもあった。

清酒を一般的に購入して飲むようになったのは明治中期以降のようで、この流れに合わせて家庭用の爛用徳利が製造販売されるようになった。このころから、家庭用の小さい 1~2 合入り徳利も作られるようになり、囲炉裏の暖かい灰に埋めて爛する鳩爛、など珍しいものも現れた。

私も 1 合又は 2 合入りの徳利を造ったが、爛酒を飲む機会もないので徳利として使用したことはない。一輪挿し花瓶として使用している。

盃



故宮博物館 雍正帝 時代 絵葉書より転写
口径 5.6cm φ * 6 * 高台 2.6cm φ



毛沢東の使用した盃の複製（毛沢東の食器展）
口径 6.5cm φ * 4.9 h * 高台 2.6cm φ



北京の故宮博物館へ行った時見た、中国の雍正皇帝時代の、多分皇帝が使用したと思われる盃（豆彩 葡萄紋盃）があった。形、大きさ、高さ、絵柄が何とも言えず魅了されたのを覚えている。その後日本で毛沢東の使用した陶磁器展というのがあり、毛沢東が使用した盃も陳列されていた。

皇帝や中国のトップはどのような時に、このような盃を使用したのであろうか。儀式の時か、一人で飲む時か、又どんな酒を飲んだのであろうか。貴州茅台酒、紹興酒、白酒か、又は葡萄酒か、毛沢東は茅台酒を好んだと聞いたことがあるので茅台酒かもしれない。磁器製の美しい盃は冷たく儀式的なおいを感じ、ある種の緊張感を感じるので、一人で飲むときは違う盃を使用したかもしれない。

アルコール度の高い中国酒は酒の飲めない私には大変きつい。中国へ仕事で行った時、道路の県境上で訪問県の人達が、待っていて、歓迎の挨拶を受けたとき、歓迎用の純白の布を首にかけられ、同時に必ず小さな盃で白酒の歓迎杯を受けた。これが大変で 1 人から 3 盃飲むように勧められた。場合によっては 2~3 人から受けなければいけない。この時は病上がりだったので、ドクターストップ中だと言って勘弁して頂いた。アジアでのビジ

ネスは酒が飲めないと苦勞する。

日本の盃

	
備前焼 口径 6cm φ * 5 * 高台 3.8cm φ	漆塗木盃 口径 5.6cm φ * 4 * 底 3.7cm φ

中國では陶土で製造した盃を私は見たことがない。嗜好が日本人と違うのかもしれない。一方日本は陶器製の盃が日本の風土に合うのか、好まれるようで各地の地方窯でその土地の土を使用した盃がお土産品として販売されている。私は備前焼、信楽、伊賀焼などが好きで幾つか購入して、使用している。

写真の備前焼きもそのうちの一つで陶器製盃は温かみがあり、ぬくもりを感じ、一人で飲むときはリラックスできるので私は好きだ。

小生の作品

	
焼き締め 自然灰釉 U盃 口径 5.8cm φ * 6 * 高台 3.4cm φ	U盃 口径 6.2cm φ * 4.7 * 高台 3.4cm φ

陶芸を趣味とする人は必ずと言って過言でないと思うが、ぐい飲みを造る。私も造りしたが、なかなか気に入ったものが出来ない。

左の焼き締めぐい飲みは、電気釜で還元焼成をするために、炭を入れて焼いたもので、墨入れ器として使用したが、数回焼いていたら炭の灰が釉薬になり、緑色が付いたもので気に入って使用している。

右はぐい飲みというより盃に近いものでマット釉をかけたものだ。現在私はこの盃一杯の酒で満足している。

軍人盃（という名があるかどうかは不明）



松本市のあるジャンクショップへ入ったとき、不思議な盃を見つけた。日の丸が底に個人名とともに書かれていた。ショップオーナーが説明してしてくれた。先の大戦に徴兵又は除隊の記念に、知人友人に送った物だとのことだった。

それを知り、ジャンクショップで埃をかぶり、置かれているのに忍びなく、購入した。どんな気持ちで、これらを配り、出征していったのか、又は除隊したのか想像するも現在の平和ボケしている私にはわからない。しかしながらこの盃を頂いた人達も、悲愴感が漂う、この盃で酒を飲む気になれるのだろうか、又は、どんな気持ちで飲んだのだろうか。

身近に起こっている戦争、また経済、軍事大国となった国の外交姿勢を考えると、これからも、国家間の争い、戦争は終わらないと私は考えている。他国からの侵略や、国を守るには何が大事か今、日本は真剣に考えなければならないと考えている。戦争のない世界を願っているが平和平和と唱えているだけで平和は来ない。次世代が乱世でないことを願っている。

23/7/16